

トラフグ資源増大技術開発事業

中島博司

目 的

伊勢湾放流群の放流サイズの小型化および熊野灘放流群の適地放流による添加効率向上によりトラフグ放流事業の効果的な推進を図る。

なお、結果の詳細は関連報文に報告したので、ここではその概略を記載する。

方法および結果

1. 放流試験

- ・供試魚は、5月30日に（独）水産総合研究センター南伊豆栽培漁業センターからトラック輸送で尾鷲栽培漁業センターに受け入れ、中間育成を開始した。
- ・種苗の収容尾数は約30,000尾で、種苗サイズは平均全長26mmであった。収容時のへい死尾数は約1,300尾あり、例年に比べて多かった。
- ・イラストマー標識装着（左胸鰭基部緑色）は、7月13日から15日にかけて尾鷲栽培漁業センター中間育成施設で行った。標識装着尾数は20,000尾、平均全長は67mmであった。
- ・エアージェクター作業時間は延べ43時間、手打ち作業時間は延べ37時間で、1時間当たりの平均装着尾数はそれぞれ170尾、148尾であった。また、視認性もA：83%、B：13%で前年よりA（肉眼で容易に判別可能）の割合が高かった。

2. 資源利用実態調査

- ・0歳魚を対象とする小型底曳網、1歳魚以上を対象にする延縄について例年通り漁獲統計調査を実施した。今年度はさらに、和歌山県串本漁協の延縄漁獲実態についても調べた。
- ・漁獲物調査とイラストマー標識魚の発見は、有滝・安乗・甲賀・波切・木島市場を中心に実施した。この他、和歌山県三輪崎市場・串本市場でも調査を行った。
- ・0歳魚の漁獲は10月下旬に始まったが、12月以降は水温の急激な低下に伴い減少した。1月までの漁獲尾数はやや前年を下回った。
- ・延縄による漁獲量は18.9トン、水揚げ金額は1億

6,600万円で、それぞれ前年比73%、71%であった。

3. 放流効果調査

まき網

- ・H15木曾三川河口沖放流群（2歳魚）が0.04%、H14熊野市放流群（3歳魚）が0.07%、常滑市沖放流群0.17%、H13常滑市沖放流群（4歳魚）が約0.08%であった。

小型底曳網

- ・H17野間沖放流群が0.38%、木曾三川河口沖放流群が0.05%、太田川河口放流群が0.23%であった。

延縄

- ・H16伊勢市放流群（共同）が2.03%と最も高く、次いでH16矢作川河口放流群が1.24%、H16木曾三川河口沖放流群が0.90%と、伊勢湾内放流群が高かった。この他、H16浜名港放流群が0.62%、H16熊野市放流群が0.56%と推定された。さらに、H15熊野市放流群0.03%、熊野市放流群（共同）0.06%、木曾三川河口沖放流群0.06%、浜松市放流群0.11%、H14常滑沖放流群0.03%と推定された。
- ・和歌山県三輪崎では、H16熊野市放流群が0.65%、伊勢市放流群（共同）が0.07%、矢作川河口放流群が0.01%、H15木曾三川河口沖放流群が0.01%と推定された。串本でもH16熊野市放流群が発見された。
- ・H16熊野市放流群の熊野灘南部海域（紀北および熊野地区）および和歌山海域の回収率はそれぞれ0.53%、0.65%合計1.18%と推定され、前年の0.69%より約1.7倍高かった。また、熊野市南部海域と和歌山海域の回収割合は1:1.2で、前年と同じ結果であった。

4. 伊勢湾放流群のサイズ別回収率

- ・放流サイズが全長70mmまでは、放流サイズが大きいかほど回収率が高いことがうかがえた。また、全長40mmサイズ以上で回収率が急激に増大する傾向も示唆された。

- ・次年度以降のデータも合わせて、適正放流サイズの検討を行う必要がある。

5. 熊野市放流群の経済効果と放流技術の検討

- ・H16熊野市放流群はその約90%が熊野灘南部海域および和歌山海域で回収されたと推定されたこと、月別回収割合は10 11月には87%を12 2月は22%を占めたことから、同放流群は大きな移動分散することなく放流周辺海域に留まり、漁期が開始された10 11月に集中的に漁獲されたと考えられた。これに対して、H16伊勢市放流群（共同）は上記海域において10 11月には13%を、12 2月は44%を占めた。さらに、漁期後半である12 2月には、標識放流魚の約70%がH16伊勢市放流群（共同）を含む伊勢湾由来の放流群で占められた。このことは、漁期後半になると、トラフグが伊勢湾・遠州灘海域から南下してくることを示唆した。

- ・H16年熊野市放流群の延縄による経済効果を試算したところ、漁獲量と水揚げ金額は、熊野灘南部海域で102kg、65万円、和歌山海域で116kg、60万円、合わせて218kg、125万円と推算された。
- ・これまでのイラストマー標識を用いた調査で、伊勢湾がトラフグの放流適地と考えられた。しかし、熊野灘南部海域での前述した漁獲回収の実態を考えると、伊勢湾に放流するよりは熊野灘南部海域に放流したほうが良いと判断される。したがって、熊野灘南部海域での放流事業は現状通り継続すべきであると考えられるが、放流種苗の添加効率の向上が図られる適地の探索が必要である。

関連報文

H17年度資源増大技術開発事業報告書 回帰性回遊性種（トラフグ） 福岡県・佐賀県・山口県・三重県・愛知県・静岡県・秋田県